

## (I) 戦旗系党内斗争に関する我々の原則的立場

① 本中央委員会に出席するに当り、連名の中央委員ならびに東京南部地区委員会「鉄の戦線」編集委員会と「鉄の戦線」を編集軸とする諸同志(獄中者も含めて)現在の同盟(戦旗系)内党内分派斗争に対する原則的立場を明らかにしたいと考える。この詳細は、ヴァイボルグ15番を参照していただくことにして、要旨をかいつまんで述べると次の諸点にまとめることができる。と考える。

② 第一点は、その政治的基礎に關してである。このことは、主として、「戦旗系」の総括としてある。これについての一つの問題は、第2次ナントの総括の方法に關してである。我々が『第2次ナントそのものは、自己の上揚を、自己が生み出したものがその発展した質において、再び、それを生み出した主体としての党そのものとの一体化を要求しているという意味において受けとめなければならないのである。そして我々にとって党の革命とはその実現である』(ヴァイボルグNO/5 II P5)として「第2次BUNDの内的止揚」をめざすのに対し、日向派は『第2次BUNDは7-6において赤軍派を生み出すことによって崩壊した』として、『自己の上揚の契機を、我々が血みどろの党派斗争を展開してきた赤軍派に求め』『我々とは相対的に無関係の地平から第3次BUNDの「建設」を日指すものとしてある』こと、本中央委員会への結果の政治的基礎の第一点は、まさに「第2次BUNDから第3次BUNDへの内的止揚をめざす」点にあると考えている。

2つめの問題は、以上との肉體における、かかる内的止揚をいかなる方法で打ちとっていくのか、ということであり、戦旗系内党内斗争における、日向派の方法に対する批判で一致することである。日向派が同盟内論争の「止揚」でなく、他方ラリを切る」ことによって突破をつけようとする方法は、まず第2次ナントの総括の異質性に基因しつつも、それにとまらせず、「科学とイデオロギー」「理論と実践」領域における序野的理解によって理論づけられていると我々は考えている。日向派は、党内斗争において自己の理論をおろかじめ絶対化するところから出発し、この理論に

よるBUND内における同心円的拡大を「党の革命-第3次BUND建設」として設定してきたからである。この自己の理論の絶対化の根柢たる序の科学主義について、我々の結論は、序のスターリン主義批判を経済学上展開しつつも、結局スターリン科学主義の裏がえしてしかなく、科学主義において両者は一致していること、スターリンの党内斗争の展開が、除名→粛清へ向かったのと同様に、科学主義をその内実とする日向派の党内斗争の展開が「切る」ことを自己目的化することの理論的根柢があると考えるのである。

3つめの問題として我々が第3次BUNDへの確證として獲得すべき内実について、簡単にふれておきたい。この詳細は、ヴァイボルグNO/5および本文(Ⅳ)の項で展開されているが一言でいうと「カドキ在界における在界党」の措定であり、この内実を一貫した論理体系で勝ちとることだと考えている。唯物史観-資本論-帝国主義論を、党の内実として一貫した体系で打ちとるということである。

③ 第二点は、その組織的基礎に關してである。これについては我々は9CC南備問題をめぐり11月5日以降、理論派によって機関を媒介とする原則的党内斗争から分派斗争に移行したと判断した。9CC南備問題に關して我々は詳細を知らないが我々の主体的周りを若干述べておく。11月4日、当時南部地区委員長Sは、佐々木和雄氏(書記長)と、午後1時から戦旗社わきの喫茶店「S」で約2時間ばかり会見し、(i)代行Pで正式にCCが招集された場合には参加すること、(ii)11月4日中に代行Pで決定された場合には連絡されること、(iii)11月5日に代行Pで決定された場合には我々が待機する場所へ連絡されることを要求し、相互に確認して別れた。(後に、中央政治組織委が、戦旗社で11月4日正后から開催された云々の話があるが、正にその時刻にSは佐々木氏と会見していたのである)その後、佐々木氏より11月4日代行Pが開催されなかったことを確認した。11月5日午後1時になっても佐々木氏より連絡がなかった為、我々は予定された会場へTELし代行Pが開催されていないことを確認し、CCが招集されていないことを確認した。

(1)

※上述のごとく我々は9CC南衛問題に関して組織原則的に対応したのであるが11月5日夕刻からおきた事態は、理戦派からの3マラクに対する自己批判要求であり我々はここから党内斗争の分派斗争へと理戦派によって主体的に転換したことを確認した。

二つめの問題は、しかし我々は、関西派→神奈川派の同志と闘い、その後、支部代へ参加し11.15→11.22斗争へも主体的に参加し、理戦派との党内分派斗争を貫徹する方向を追求した。ここで11月13日付戦旗「神奈川AIFアピール」において、現在の神奈川県委を「同盟外」と規定し「地区党建設→AIF再建」が提起されるに及び、11月5日における党内斗争への転換が、大衆的にも明らかになったことを確認し11.15→11.22斗争には、独自の軍団を形成して参加する路を選択したのである。

三つめの問題は、12月3日付戦旗に再び「神奈川AIFアピール」が掲載され、かつその内容においてアントを代表して破防法で獄中にある仏評長及び我々に対して「我同盟内(?)」なる文章が掲載されるに及び、12月5日付でXX編集長に対して、独自の自己批判要求を提示したのである。

戦旗11月13日号「神奈川AIFアピール」、12月3日号「神奈川AIFアピール」に掲載に関する野田編集長に対する自己批判要求

①我々は、神奈川県委員会(〇〇委員長)を地区機関として認定している。

②従って、かかる県委員会を「地区党体制とは無関係」として、別に地区党建設→AIF建設を宣言する2つの「アピール」は、神奈川県委員会に対する公然たる分派宣言であり、我々はこの「アピール」を認めることは出来ない。

③又、「我同盟内(?)」における「原理が一つなければならぬ故に、普遍本質論は産業資本主義段階と帝国主義段階を貫く、原理的抽象の論理でなければならぬ」(仏「暴革命」P9)とする結局は講座派の世界的城郭論し得ない諸君……(12月3日アピール)のくだりに関して

同盟を代表して破防法で獄中にある「仏評長」及び

仏理論を支持する諸君とを包括して「我同盟内(?)」と疑問符をつけ、あたかも「仏評長」及び我々が同盟外に存在するかの如き表現をしていること、について我々は全く事実に対する表現でありこの「アピール」を許すことが出来ない。

④従って、かかる分派宣言としての「アピール」を掲載することによって「戦旗」を一マラクの機関紙に落しめたことについて

我々は党内斗争を機関を媒介とした正常な運営に戻すべく、編集長に対し自己批判及び「アピール」の撤回を要求する

これに対して、野田氏は「現在自己批判するつもりはないし、今後ともわからないであろう」と全く、機関紙を一マラクのものとする行為を正当化する発言したのであり、我々は、この時点から我々から主体的に分派斗争として理戦派の解体にむけた闘いを組織する態度を表明したい。

④我々は、※上述のごとく、政治的、組織的基準に基づき本中央委員会に断固として参加し、理戦派の解体、関西派の他の諸同志との相互上揚にむけた原則的党内斗争の展開の下に、世界革命戦争→世界プロレタリア樹立を当面の目標とする「過渡期世界における世界党」建設にむかって、全この力をふりしぼって闘い抜いていくであろうことを決意したのであり、全この全この同志に明らかにするものである。

II) 提起されている同盟の3つの基準に関する我々の態度

⑤ 本中委委員招集にあたり、陶西派の同志より提起されている、同盟再構築の3つの基準についての我々の態度を明きらかにしていきたい。

3つの基準とは次のごときものである。

オ1点 世界一回同時革命戦略の肯定と世界同時革命の承認

オ2点 「スターリン主義打倒(反スタ)マルクス主義を打倒し、革命的マルクス・レーニン主義を復権せよ」のスローガンに表現されているところの「反スタマルクス主義の止揚」の問題

オ3点 XXXXXX建設に関する一致

⑥ 以上の提起に対し、我々は、まずオ1点に関する我々の態度、立場から明きらかにしていきたいと考える。

この問題に関しては、一言でいえば「堅く一致する」ということである。以上の立場を明きらかにした上で、我々の同盟大綱→「後の戦線」を通じて明きらかにしてきたこの問題に対する立場と、ヴァルカン12号→「同盟」の同盟パンフで示されている内容とを若干検討したいと考える。

⑦ 我々の掲げる世界一回同時革命戦略批判、永続世界革命戦略批判、世界同時革命の主張は、「後の戦線」(P67-71)「英雄を文への道すじをめぐる競争への我々の同盟提起」に述べられている通りであり、現存的にも其を廃棄はない。従って、我々は、烽火1号における「世界一回同時革命戦略、革命を文列打倒(2)ブロック同盟→スタ打倒」、左派1号、2号の「永続世界革命戦略」からの脱却、希冀と「世界同時革命戦略」への統一を歓迎するものである。

我々は「単一の世界スロテラ」にむけた「世界同時革命」——この意味が能としての「世界同時革命」を力ドキ世界の建設的能態と「世界統一世界革命」の主体的建設として、主要衝刺から権力闘争の推進過程それ自身を革命的斗争の場として設定し、かかる国際的党派斗争→我々の同盟国際ストと国際中共派との党派斗争

争として想定するのであるが)の曼徹→世界(単一)党建設をもってはじめて単一の世界スロテラ(我々が設定できると考えている。

従って我々にとって、主体的には①自己を「世界統一世界革命」へ引きあげ確立すること ②同時に、この国際的党派斗争の貫徹にむけた「世界(単一)党派」の形成 ③「NATO、安保、ワルシャワ」の介入を分断しつつ前進する、かかる権力斗争と党派斗争の一体化 ④「世界(単一)党建設→単一の世界スロテラ」として設定していることである。

⑧ 次ぎに、提起されているオ3点についての我々の見解を明きらかにしておく。

これについても、一言でいえば「堅く一致する」ということである。理論派の議論から「労働者ハレテ」派という、ありがたい(?)名称をちょうだいしたことについては、我々自身の主体的限界としてとらええしているのであるが、我々の主体的決意は昨年斗争→今年斗争において、我々が具体的にとった行動をもって判断していただくに、又、「天象Mの半信半疑さん」からかかるレッテルをはらわせたことともども十分に理解されるかと考えている。

⑨ このオ3点の問題は理論的には「ソヴェト型革命」に関する記憶の問題として存在していると考ええる。この点に就ける結論は、ザイボルグNO.13 P(A&B)に述べたことにつきるのであるが、「トロツキー」10月の殺害、「トロツキー」P130)に記述がある1905年の場も1917年の場も、労働者代表ソヴェトは斗争の指定段階に於る自然な組織として運動自体の中から成長した。しかるに、ソヴェトを「総論」まで原則として多かれ少かれ受け入れている若しヨーロッパの諸党は常にソヴェトを物神崇拜的に、即ち、革命のある種の発見的要素として取り扱う態度を死している。更に権力の為の斗争の代理としてのソヴェトは多くの利益をもっているにもかかわらず、蜂起本他の組織形態(工場等、労働組合等)と基礎として展開し、ソヴェトが蜂起そのものの中からの発生し、もしくは、どこか勝利をおさめた後にすら国家権力の代理として発生する場合も充分ありうる」と認らしているように、「次は何か」

次で「統一戦線の最高形態＝ソヴェト」論だけとりあげることには重大な誤りともたらすのであり、「ソヴェト型社会建設」を歴史的に捉える誤りを指摘し、「歴史的に捉えるべきものは、権力獲得期におけるプロレタリアートの階級状況としてのソヴェトなのである。我々は、かかる意味においてソヴェト型革命を捉えるついでに、ヴィンダツとしたのである。

ヴィンダツNO.13における「ソヴェト内閣」に関する定式化において、我々の懸念点は次のことである。即ち理論上の恒常的武装闘争の破壊スローガン（あるいは、内閣のスローガン化）としてある「革命解体－正規軍建設－ソヴェト型社会建設」に我々も同意しつつ、かつ、トロッキー「10月の教訓」を踏まえ、「現在の地区共闘を革命行動帯の建設から展望し、それを、ソヴェト型社会形成の意識性のもとに導くことは、基本的に正しいと考えるが、地区共闘の発展の延長上に、武装階級の機関としてのソヴェトが形成されていくなどと考えすることは、権力の先行的収縮の項に対する全くの無自覚（ヴィンダツ）として、「ソヴェト型社会建設」を指すにおける意識性以上に言いえないことを明らかにしたのであるが、現在から捉えかえしてみると、恒常的武装闘争の内閣という一種主義的立場のため自身に中心的な疑問を抱いており、「革命解体」自身が、既に「反革命軍隊解体」(NATO・安保軍解除)である以上、基本的にスローガンは「革命解体－正規軍建設」をよいと考える。

同じ次の同様の懸念する「ソヴェト型社会建設」に「人民武装」を対置（？）しようとする意向性、要そのものの意はあるにせよ、その自身は、尚且における意識性としてしか表現されないと考える。

III) 「反スタマルク主義の止観」の問題に対する我々の見解

①さて、オーストリア、オーストリアの議論に関する我々の見解表明(3頁)、オーストリアの議論を批判して進めていきたいと思います。

(はじめに若干、ことわりをつけておく。我々にとっては、なにしろ、「結託」だけの大派のパンフを諸君同様に検討しに際すのである。未だその論理を完全に把握できていないことと十分に関心があるので、以下の議論に対する不十分性を十分に考慮され、その誤解の上にならぬ我々の論議であった場合には、同様の批判をさせていただきます。) ①まず、(前回) 同派のパンフに拠って、反スタマルク主義の止観の「結託」をいっしょに検討してみたい。

①まず、(前回) 同派のパンフに拠って、反スタマルク主義の止観の「結託」をいっしょに検討してみたい。パンフ②『世界プロレタリアの綱領的諸問題』(9-10)より引用するものは次のようになる。

(1)『マルクスによって明らかにされた資本主義体制批判—共産主義社会論を基盤に』

②『パンフ②—9』において「反スタマルク主義の批判」として『スタマルクを第一に社会主義批判』として行っているのは、共産主義社会論として日米元にも存在しているものの多くは反スタマルク主義である。これは資本主義の原則的批判において「ヨータ」(「資本論」)からなるものに自返し、その最良の部分ですら、「自論」原理をこえざることを示さざる由

『共産主義社会論の資本主義に対する原則的批判』は、いまだ徹底して行われていないもののバロメータであり、我々の「ヨータ」の同じく綱領的基盤にすえつつ、スタ・反スタをいっしょにする一切のマルシヨア・イテヒ厳しく批判する必要がある。この点に関して問題は従来整理しすぎた。」

(b)『レーニンによって創出せられたプロレタリアの力』(カドキ世界誌)

(c)『世界プロレタリアの力同様に基準として』(世界プロレタリア—第一共和制)

(d)『アババ・カストロ派を含む現存する諸派系に対する原則的批判』は、いまだ行われていない。

要約すると、(1)資本主義体制批判—共産主義社会論における「資本論」—「ヨータ」の復権、およびインターワルスの国際共産主義批判としてカドキ世界誌の由来(2)世界プロレタリア—第一共和制の主張、(3)以上の基準にもとづいて国際諸派系への原則的批判、ということになるのである。

②さて、我々の主張する再編は、この「カドキ世界」に集中する。

パンフ③『オーストラリア共産主義者同盟の持つていた過渡世界誌の経緯』(P.605、若干引用して見たい。

(2)カドキ世界誌のすくもマルクス主義者は、国際的共産主義、国際的共産主義の中心となる日米同派にあるのであって、世界を覆う立場に立ってその勝利を成すことはできない。

(b)1917年ロシア革命によってプロレタリアの力が増えつつも、レーニン主義の限定的、第一共和制の世界第一世界共産主義の中心にプロレタリアの力の世界革命戦争の中心に立つていなければならない。

(c)民族共産主義、種族共産主義はスター(1)主義を発生させて以降、

(d)スター(1)主義を打ちこわす世界建設への門は国際的共産主義の展開の方向性、世界第一の「プロレタリア」の地位に立って、世界第一世界共産主義による世界革命戦争の遂行の方向に集中してきている時代として、我々は、カドキ世界誌を編む必要はない。

(e)国際共産主義の再編と、現在の国際諸派の評価をこの観点から具体的に検討していただく必要がある。(f)現代プロレタリアの力増進をいっしょにする国際的共産主義における我々の立場の確立によって初めて可能となるのである。

③以上のごとく、カドキ世界誌、オーストリア—ワルシャワの国際共産主義批判として把握することに対する疑問は、大きくいって次の2点である。

オーストリアは、我々の主張する「主体的国際共産主義」としてカドキ世界誌を捉える方法への懸念をいって、「左派2号」の『世界プロレタリアの力』を統一共和制として結託するためのスター(1)主義の国際共産主義の要をいっしょにした」といっしょに結託しつつも、スター(1)主義に反対する。1111の「プロレタリア」系は、カドキ世界誌





⑬ ひとつは、社会主義社会に於ける、「シュタット=ペー  
ゼン」の地位である。8回大会—8回大会2CC)以来の論  
争であるわけであるが、当初は、田原氏の「社会主義に  
口独が残る」という、いわば「社会主義に口独が残る」と  
いう主張に対する、仏、日向氏の「世界的統一階級制」  
ないし「共産主義階級制」の主張があったことは周知の通  
りである。この論争は、9回大会に於いて「世界的統一  
社会主義—共産主義」という段階区分として、一時的理論  
的結着は着いたのであるが（この点、烽火NO. 1の巻論  
文P41に於ける『共産主義の発展に於ける討論の中で』以上  
の2段階区分が決定された』というのにはまちがっていると  
考えている）烽火NO. 1に於いて、田原理論を総括しつ  
つ、「口独統制」、今回のパンフに於ける「口独統制」な  
いし「将来の口独制度」の主張となつていふと考える。か  
かる意味で、論争は前進しているのであり、結論的には、  
「党（新たな陣の）とシュタット=ペーゼン」の任ムとは  
何か？として焦つめあげられるべきだと考える。我々は、  
この「シュタット=ペーゼン」に於ける論争に対して、従  
来の主張との関連を早急に着手することを明らかにしたい。

(前ページより) (5つ2き)

\* 本つぎまでなく、党の政治目的に、党の正統性は  
維持して維持され、口独を政治目的に維持する  
ところの統一軍とならなければならぬ』に於いてあ  
ることは、我々の現在の主張に於いては、和  
ち、党の正統性（至く民衆的であらう）、その前提として  
『一党独裁に於いて統一の基準となる世界革命戦争  
に口独統制維持をひきつけること』を主張している  
のであって、岡田氏の主張する「統一軍の政経」  
「ロレタ」の本質の論争と明確に符合するものだ  
と考える。

(左段⑬につづく)